

宮内庁HPに、イラク人道復興支援に従事した陸自隊員の無事の帰還を皇后陛下が、「帰還」と題して詠まれた歌が掲載されている。有り難い事である。

「帰還」

「サマワより 帰り来まさむ ふるさとは ゆふべ雨間（あめま）に カナカナの鳴く」
宮内庁解説「サマワの自衛隊員に、両陛下は長い間御心を寄せておられた。この御歌は、隊員の帰国が決まり、ホッとされたお気持ちを、雨間に鳴くヒグラシの声に託してお詠みになったもの。」

(宮内庁HP : <http://www.kunaicho.go.jp/gyosei/gyosei-h18.html>)

さて、平成 19 年（2007 年）も静かに明けた。新春のスポーツも波乱なく、順風のうちに新しい歳が始まった。昨年は義父や義姉の逝去、義母の引き取り、孫娘の音大付属小への編入やそれに伴う娘夫婦の引越し等々もあり何かと気忙しい 1 年であったが、今年は良い歳であって欲しいものである。

年末に幸先の良い話が飛び込んできた。息子夫婦からの報告によれば、小生待望の男の赤ちゃんが、来る 4 月には誕生の由である。田舎の親父も喜んでくれよう。今時、跡取り息子などと言う概念は廃れつつあり、まして引き継ぐべき財産とてない者にとって、跡取り云々は今更何をの感がするが、小生の想いを幾許でも引き継いでくれる可能性のある男児（男性社会なるが故に男児の方がその可能性が高いのは致し方なかろう。）の誕生は、それでも嬉しいものだ。母子共に元気で誕生のその日を迎えて欲しいと願わずには折れない。

年末年始の我家の恒例の行事が何時もの通りに滞りなく実施できた。

先ず、除夜の鐘が終わるや、村の鎮守様である地元の須賀神社に初詣に出掛け、元旦には子供達が拙宅に集まり、屠蘇で祝い、雑煮や御節を食べて、この新年に想いを新たにしました。



(須賀神社)

二日には、恒例により、孫や義母と共に靖国神社に初詣に出掛け、国家安寧、五穀豊穰、家内安全、子孫繁栄、無病息災を祈願した。



(靖国神社と境内の四季桜)

昨年に比して初詣客が少なかったように感じたが、どうなのだろう。意外に感じたことは、晴れ着を着た女性や和服姿の男性等を殆ど見掛けなかったことだ。最も小生も車を運転するので普段着であり、威張りはしないが・・・年々歳々、小生の記憶にある正月のあの晴れやかさが、喪われつつあるのではなかろうか。

街に祝日と言うのに国旗が翩翩と翻ってなど居ない。国旗を掲揚している家を探すのが難しい位だ。小生の幼き頃には、家々には門松や注連縄が飾られ、国旗が翻り、賑やかに子供等が遊ぶ姿が当たり前だったのに、いつしか、日本のその様な正月の原風景が喪われてしまったようだ。

門松、注連縄にしても、今では、店の玄関に『謹賀新年』の祝詞を貼付して代用するのが普通になってしまった。その内それすらもなくなるのではなかろうか。車に輪飾りを着けているのも殆ど見かけなくなった。

「初荷」と大書された札を付けた車が走り回っていたのも、今は昔のことである。また、「仕事始め」の朝、通勤電車に晴れ着を着た女性など全く見掛けない。社内においても僅かに新年の挨拶が個々に或いは纏まって交わされるのを除けば何時もの仕事風景である。正月の話題で花が咲くこともない。賀詞交換会や新年会は実施されているが・・・

銀座を歩いてみても、門松が飾られているのはちらほら、人手は多いにも関わらず、着飾った老若男女を見掛けることもなく、僅かに街灯に国旗が掲げられているのが正月らしいと言うべきか。

我がマンションでも注連飾りをしている住戸など数える位である。年越しそば、お屠蘇、御節、鏡餅飾りなどの日本古来の正月のしきたりがライフスタイルの変化によって無くなって来たようだ。



(銀座にて)

何れにしても、古きよき日本の原風景が喪われつつある。伝統的なものを遵守すべきだとは言わないが、それらには日本人の叡智が込められている。全てを忘却・放擲すること

が合理的と言う訳ではない。また、人生や歳の折々の節目に立ち止まって物事を見考えることは決して益なきことではない。

娘がお重を購入し、おせち料理を作って娘達にお正月らしさを味わさせたということは良いことである。伝統的なものは女性から女性へと伝わって行くものなのだろう。